夢通信

第１５号（2020／6／10）

住民流福祉総合研究所（木原孝久）
埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1476－1
http://juminryu.web.fc2.com/

文明の発達が人間の尊厳を危機に晒すという奇妙な事実。一体なぜ？

■文明の関心事はアメニティ、効率。尊厳には興味がなかった

⑴まだ小学校の避難所に行くのか？

最近の文明の発達は目覚ましいものがある。私達の生活は大変便利になった。それには誰もが満足しているのではないか。文明は当然、私たちの尊厳も守ってくれるはずだし、現にそうしてくれていると私たちは思い込んでいるが、本当にそうなのだろうか。

北海道で地震があった後、たまたま現地に出向いたので、「その時」のことを住民に聞いてみた。やはり悩みは避難所。私が聞いた人が行った避難所は外国人でごった返していて大声が飛び交い、トイレは汚れて使えない、赤ちゃんの泣き声やいびきの音もあちこちでする。とても眠るどころでなく、他の避難所に退避したと言っていた。

コロナ禍と災害が重なって、避難所に行くことになれば、三密はどうなるのか。私が不思議に思うのは、こんな現状なのに、まだ小学校などに避難所を作る気でいることだ。小学校という避難所は、発達した文明の成果なのか。

⑵まだ仮設住宅を作るのか？

阪神淡路大震災を教訓に、東日本大地震の時には「みなし仮設」に避難した人たちがいた。普通の家を借りたということだ。

その東日本大震災の時、仮設住宅の住人に事情を聴く機会があった。隣とはわずか１枚の壁。隣家でトイレを使っている音も聞こえると言っていた。ということは、こちらの音も向こう様に聞こえているということだ。暑い夏の日、東京の息子の家に行って、たっぷり冷房の涼しさを満喫した後、あの部屋にまた戻るのかと思ったら、さすがに足が重くなったと言っていた。

この仮設住宅も、豊かな文明の成果とは言い難く、そろそろ改めるべきではないかという声が出そうなものだが、あまり聞こえてこない。その後の災害でも、相変わらず作られ続けている。

⑶一戸建ての避難所もできないことはないのに…

宮崎県の小林市に出向いた時、ある町内会長からこんな話を聞かされた。小林市は宮崎市の西側に位置している。彼はこの地政学的な位置を利用することを考えた。大地震があったら、宮崎市の人たちがこっちへ避難してくる。それを予期して、避難用の住宅を作ろうとしていた。立派な一戸建て住宅である。そう言えば、ある都市圏の府県は、大災害があった時のために、地方にある空き家を活用しようと考えた。普段の家屋の管理は、一定の経費を払って地元の人たちにやってもらう。この話がどこまで進んでいるのかは知らないが、せめてこの程度のことは考えるべきではないのか。

高度に発達した文明の恩恵を直接受けている私たちが、一方では災害が起きれば、唯々諾々と小学校の避難所に行き、そして仮設住宅で何年も暮らす。この違和感は何なのだろう。あの避難所こそ、そして仮設住宅こそ、発達した文明の成果だとでも言うのか。

⑷文明がめざしているのは「尊厳」ではなかった！？

そこで見えてきたことがある。元々文明は何をめざしているのか。人間の尊厳の実現ではなかったのだ。よく行政関係者がこれからの住民の生き方の指標として挙げるのが「アメニティ」だろう。心地よさ。私たちはたしかに、心地よさをめざしている。それを広く捉えてみると、同じ列にあるものとして、効率的、手っ取り早い、簡便、やり易い、すぐ効く、シンプルなどが挙げられる。

それを実現するために、対象を要素別に分別し、それぞれをひとまとめにし、専門の人が集中的に関わる。これは相手が人間でも同じで、福祉サービスは大抵、この方式で実践されている。

そうやって老人ホームができ、ほとんどが寝たきりの人のためだけの特養もできた。こんなにシンプルで、やり易い方法はない。しかも効率的だ。これぞ文明の成果だというわけである。尊厳を目の敵にしているのでなく、効率的でやり易い、シンプルなのが、文明にとっては好ましいというに過ぎないのだ。

⑸アメニティ追究の成果が「特養ホーム」？

特養ホームのような施設をいくつもつくった、関係者なら知らない人がいない、高名な理事長がだいぶ弱ってきたので、施設長をしている部下の１人が進言した。「そろそろ先生のおつくりになった施設に入りましょうか」。すると突然、理事長はワッと泣き出して、「あそこに入れられるのだけは勘弁してくれ！」と懇願したという。施設長をしているその人から、直接聞いた話である。これでわかるのは、理事長が特養ホームをつくったのは、人間の尊厳を守るためではなかったということだ。それを自らが証明した。

今の福祉システムをつくったのは厚労省の人たちだろう。彼らに、「あなたが特養のようなものを

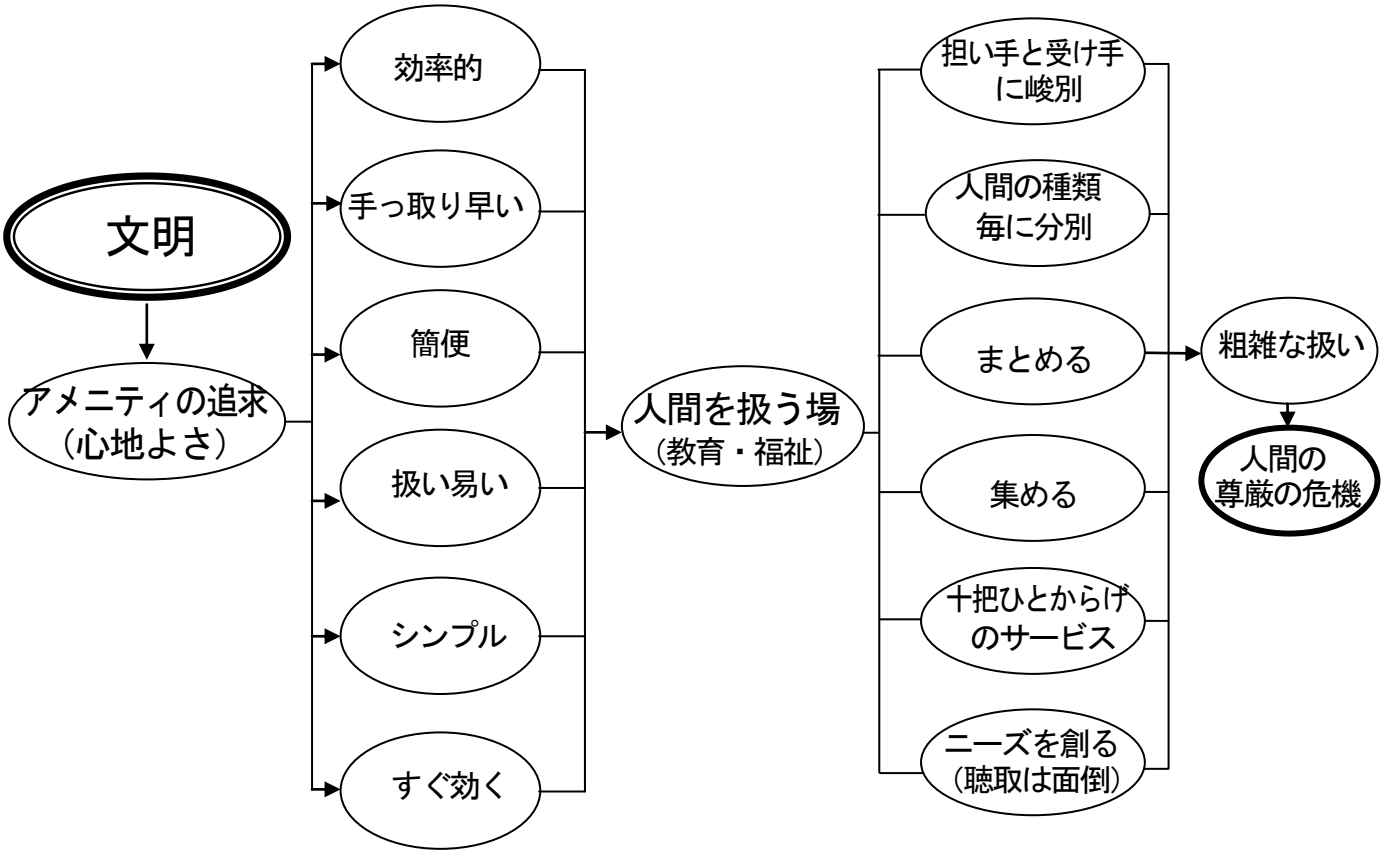
つくったのは、人間の尊厳を守るためですよね」と聞いたら、当惑するのではないか。

同じようにして、災害担当課が避難所をつくったのは、とりあえず効率よく住民の安全を図るためである。仮設住宅も同じだ。そこには「尊厳」という理念はないに等しい。「そんなことを言っている場合か？」と目をむいて怒るのではないか。しかし住民は場合によっては、そこが「終の棲家」にならざるを得ない。どんなに危急の活動でも、そこに「人間の尊厳」が盛り込まれなければならないのだ。

⑹「ボタンの掛け違い」はどこで起きたか？

整理してみよう。文明は私たちが求める「アメニティ」（心地よさ）を実現してくれる。アメニティは以下のような６項目によって実現される。

ところが、文明は私たちの生活を心地よいものにしてくれた一方で、人間の福祉や教育の分野でも、同じ手法で関わってきた。図の右側の６項目になる。このやり方を取ればどうなるか。人間を粗雑に扱うことになり、文明社会には似つかわしくない粗雑な福祉や教育になり、サービスの現場



でいじめや暴力がはびこるのも大きな特徴だ。ここが文明の病気の部分と言える。文明は意外にも、人間の尊厳を損なう要因にもなっているのだ。だから、文明的手法は人間を扱う分野では使うべきではなかったのだ。

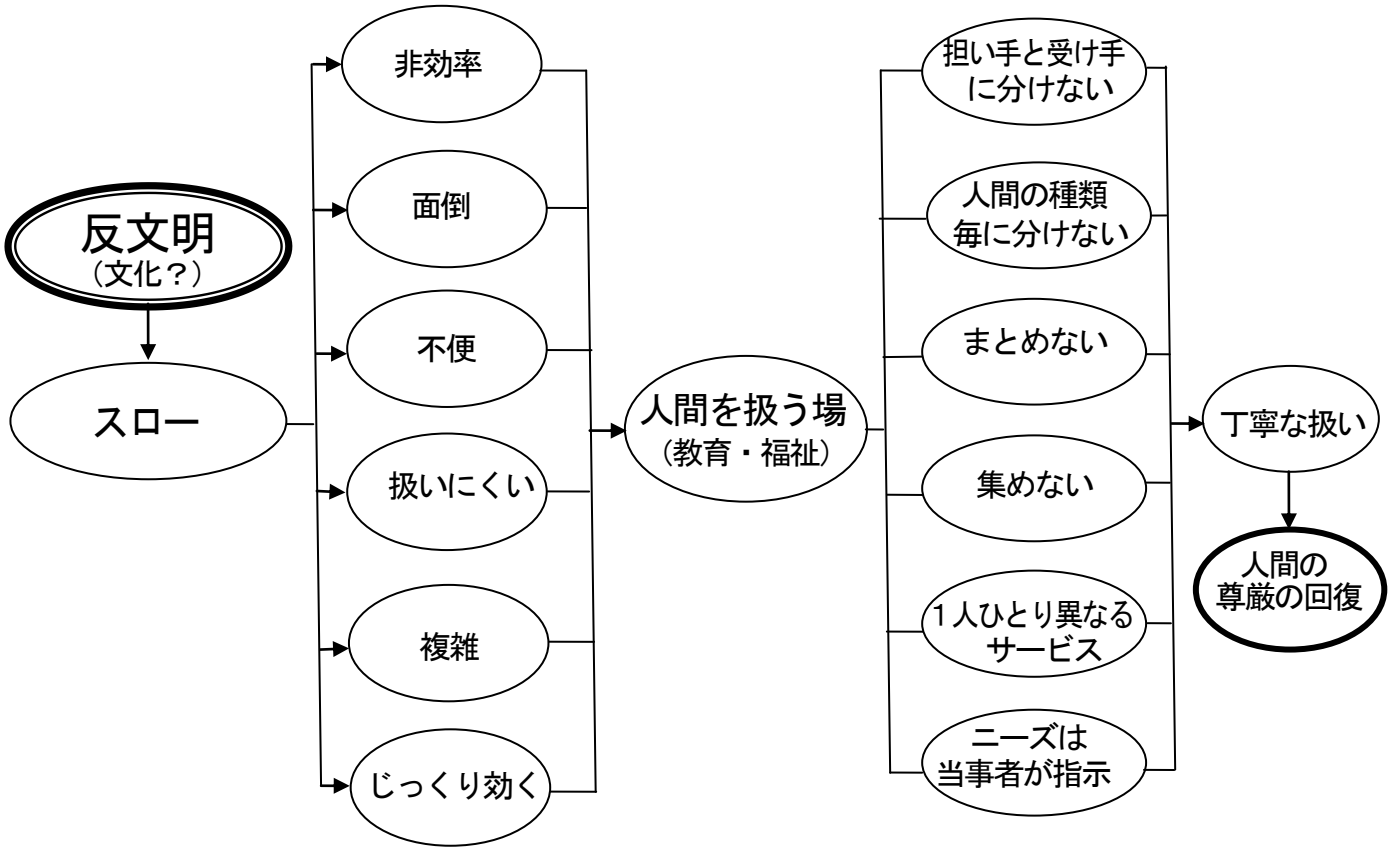
⑺右手に文明、左手に反文明を上手に使い分け

以下に紹介する「スロー」は、文明とは正反対の世界で、これを「文化」と言うのかもしれない。私たちは、アメニティを実現してくれる文明を、生活を豊かにしてくれる面で大いに活用する一方で、私たち人間同士の関わり合いに関する部分では、文明とはちょうど反対の「スロー」でいけばいいのだ。福祉や教育の分野では、以下の右側に並べたような対処法になる。これなら人間を粗雑に扱うことなく福祉を実践することができる。

阪神淡路大震災を教訓に、東日本大地震の時には「みなし仮設」に避難した人たちがいた。普通の家を借りたということだ。

その東日本大震災の時、仮設住宅の住人に事情を聴く機会があった。隣とはわずか１枚の壁。隣家でトイレを使っている音も聞こえると言っていた。ということは、こちらの音も向こう様に聞こえているということだ。暑い夏の日、東京の息子の家に行って、たっぷり冷房の涼しさを満喫した後、あの部屋にまた戻るのかと思ったら、さすがに足が重くなったと言っていた。

この仮設住宅も、豊かな文明の成果とは言い難く、そろそろ改めるべきではないかという声が出そうなものだが、あまり聞こえてこない。その後の災害でも、相変わらず作られ続けている。

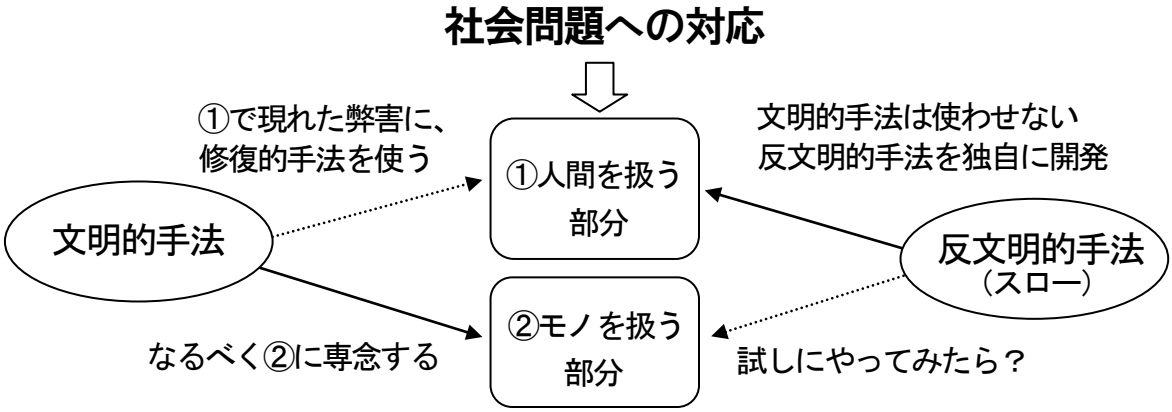


⑻矛盾する両者を兼ね備えた奥行き深い人に

「右手に文明、左手にスロー。上手に使い分けを」と言うと、両極端の資質を１人の人間が持てということだから、ある意味、無理な提案といわれるかもしれない。

ただ人間の可能性について、初めから限界を決めてしまうのもおかしい。人間を扱う部分で、文明的手法が意外に生かされることもありうるのだ。

下の図は、今の段階での最もオーソドックスなあり方であって、お互いが文明的手法と反文明的手法を頭の中に入れて、状況によって、２つをうまく出し入れすることも、これからは必要かもしれない。



⑼「尊厳を守る」とは？

今の福祉関係者が普段、「尊厳を守る福祉」と言うのを聞いたことがない。毎年たくさんの市町村を訪れて講演などをしているが、そこで主催者の挨拶を聞いていて、尊厳という文字が出てきたことはまずない。一度厚労省関連の委員会かなにかで「尊厳」という表現が盛り込まれたようだが、私の考える「尊厳」ではなかった。

先程から取り上げている小学校の避難所や仮設住宅がつくられるとき、そこに「尊厳」という視点が担当者の頭の中にあるだろうか。そういう危急の場合だから、尊厳を考える状況にはない。だからそれでいいのではなく、だからこそ尊厳を考えなければならないのではないのか。

いや、小学校に避難してくる住民も、ここで自分の尊厳が守られるべきだとは考えていないのではないかと反論する人もいるだろう。

⑽人間には要求水準があって、始終上がったり下がったりしている

人間と尊厳の関係で、いちばん私たちが見逃しやすいポイントがある。人間の頭の中には尊厳に関する要求水準というものがあって、その水準は、しょっちゅう上がったり下がったりしている。これが曲者なのだ。

小学校に避難してきて、その騒音やトイレのひどさなどに辟易すると、要求水準の危機が訪れる。

しかしここに居続けなければならないのだから、いつまでもこれに不満を感じていてもストレスがたまる一方だから、急遽、要求水準を下げようとする。「まあ、とにかく雨露がしのげたのだから、これでよしとしなくちゃ」などと言って自分を慰める。小学校に来た人たちが揃って要求水準を下げるのだから、不満の声が一定以上まで上がることはない。こうして人は、自分の尊厳が傷つけられていても、要求水準を下げることで、不満を自分なりに鎮めようとする。こうして、何十年たっても、小学校の避難所が存在し続けるのだ。

東日本大震災の時に「みなし仮設」というのが登場した。すると一挙にそれが広がった。その先駆事例を聞いた途端に、その人たちの要求水準の針がピンと跳ね上がったのだ。

コロナウイルス禍で、軽症の人はビジネスホテルの個室に泊まれることになった。この情報がおそらく日本国民の頭の中にインプットされた。これで要求水準が少しアップした。最近、コロナと水害が同時に襲った時の対策を始めた自治体があり、ビジネスホテルとはいかないが、各自が自宅近くのマンションなどに泊めてもらうという方法が検討され始めた。このニュースを見た全国の自治体が、同じことを考えるのではないか。「脱小学校」の始まりである。もともとコロナと水害が同時に来れば、従来のスペースでは一部の住民しか収容できないことが分かっている（NHKによれば、多摩川沿いでは浸水区域内の人口の２４％しか収容できない、つまり７６％の人は「あぶれる」ことになる）。

というわけで、私たちの要求水準は今、徐々に上がり始めている。小学校の次は仮設住宅だ。

⑾認知症だったサッチャーさんの最期はホテルリッツのスイートルーム

イギリスの元首相のサッチャーさんは、認知症になったが、亡くなるまで尊厳を維持し続けた。ロンドン公園でくつろぐ姿を「パパラッチ」した記者が、ファッションからヘアスタイルに至るまで、一分の隙もなくエレガントで威厳を保っていたと感嘆したほどだ。

サッチャーさんは認知症になってからも、ブレア元首相にエスコートされるなどして公的な場に出たり、亡くなる前日まで、政治家時代の仲間や部下たちがローテンションを組んで訪問し、政治の現状を報告したりすることで、政治の世界に触れ続けることができた。会話がほとんどできなくなってからも仲間の政治談議の輪に入り、突然、彼女らしい鋭い一言でみんなを唸らせたという。ずっと自宅で、「神からの贈り物」と呼ばれるほど素晴らしい介助人の女性が寄り添い続け、最期は「ホテルリッツ」のスイートルームで過ごした。

サッチャーさんが最期の日々を過ごしたとされる部屋
（写真はリッツホテル公式ページより）

これが認知症の人の、尊厳を守り抜いた生き方であり、支援の仕方なのだ。文明の成果物である老人ホームの出番はなかった。

国民の要求水準を上がるために一番手っ取り早い方法は、こう

いう事例がどんどん出てくることだ。あまりに実践例が少ないと、水準を上げようにも、その手立てがないのだ。

⑿人間の尊厳を守る12のキーワード

ところで、人はどういう状態に置かれたら尊厳が守れたと言えるのか。尊厳を守る方法にはどんなものがあるのか。以下に１２のキーワードを並べてある。これらのいずれかが具備されたとき、その人の尊厳は守られたと言えるのではないか。その要件はいろいろあって、しかも１人ひとり、その中のどれが必須のものかはわからない。しかも、１２項目は一般的な要件なので、具体的にはこれをどう生かせばいいのかは、各自で考える必要がある。

なお、この詳細については、まもなく発行される冊子で詳述している。

人間の尊厳を守るキーワード一覧

1.当事者の遇し方

❶本人発＜当事者である私・本人が主役だ＞

❷1 人ひとり＜私をひとまとめに見るな＞

2.問題解決の方向

❸フェアネス＜ハンデをつけてほしい＞

❹スロー＜ご近所づきあいを取り戻したい＞

3.救済の対象

❺日陰に光を＜日陰に置かれた人を救え＞

❻森羅万象＜動物も樹木も救済し合っている＞

4.問題の捉え方

❼ポジティブ＜障害は才能、ワルも能力だ＞

❽全体を見る＜助けと助けられは共同作業＞

5.問題解決の人材

❾アマチュア＜世話焼きさんを登用せよ＞

❿ひらく＜本業や趣味の中で福祉活動ができる＞

6.問題発生の防止策

⓫さかのぼる＜問題が起きる前から備える＞

⓬権力の抑止＜権力は暴発するから抑止せよ＞

⑬認知症の人の尊厳を守るには…

例えば、認知症の人の尊厳を守るにはどういう努力をすればいいのか。そんなことを頭に入れながら、先ほどの１２項目の一つ一つを点検してみるのだ。そこで何かが閃いたら、それを企画案に組み込む。私の作業では、以下に示したものが特に重要なものになった。

この詳細についても、近く発表する冊子で紹介することになっているので、ここでは概要を紹介するにとどめる。

認知症の人の尊厳を守るために為すべきこと

❶本人発

助けられ上手の腕を磨いておく

❷一人ひとり

心を委ねられる寄り添い人を確保しておく

❸フェアネス

認知症の人にこそ超高級福祉を。かっこいい「お散歩」スタイルはいかが？

❹スロー

認知症にピッタリのスローな社会づくり

❺森羅万象

自分の周りに癒しの世界をつくる

❻ひらく

会社やグループが本人を受け入れ続ける

❼さかのぼる

進行したらどんなことをしてほしいかをまとめておく

⑭すべての福祉の場で「尊厳は守られているか？」と問い続けよう

整理すると、今の文明は人の尊厳を守ることにはほとんど関心がない。生活を便利にすることにはいくらでも協力するが、そこまでだ。

福祉や教育の場では、文明の悪い点が露骨に出てしまう。効率的に対応しようとすれば、尊厳が守られはずがないのだ。残念ながら福祉を主に進めている厚労省や自治体、それに福祉関係者のいずれもがそのようなやり方を当然ものと信じて実践している。まさに「文明の子」だ。彼らが福祉を

効率よく進めようとしている限り、尊厳を守ってくれるはずがない。

だからこそ、純粋に福祉を実現したいと思う人たちは、彼らに向かって尊厳の実現を働きかけていかねばならない。というよりも、自分たちでその実現に努力しなければならないのだ。